様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24　年　6 月　8　日現在

機関番号：17301
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2009～2011
課題番号：21659532
研究課題名（和文）：看護師を対象とした在宅看取りケアに関する効果的・効率的教育研修プログラムの開発
研究課題名（英文）：Developing an effective and efficient program for training nurses in terminal care at home
研究代表者
大町　いづみ（OHMACHI IZUMI）
長崎大学・大学院医歯薬学総合研究科・講師
研究者番号：40342406

研究成果の概要（和文）：
地域在住高齢者､看護師および在宅看取りを担当している医療スタッフ､遺族等を対象として、在宅看取りケアに関連する調査を行った。検討の結果、死亡場所の希望に対する性別による意向の違いを考慮すること、家族の受け入れ態勢と、医療管理、一部の ADL 自立、早期からの家族に関する情報提供が終末期ケアの質を高めるうえで重要であることを示唆した。今後も、在宅看取りに関するより有用な研修プログラム開発のための研究を継続する。

研究成果の概要（英文）：
A survey regarding terminal care at home was conducted on community-dwelling elderly people, nurses, medical staff responsible for terminal care at home, and bereaved family members. The results suggested that consideration of gender differences in intention regarding desired place of death, family readiness to accept the patient’s death, medical management, partial independence in activities of daily living, and provision of information regarding family members from the early stages of illness are important to increase the quality of end-of-life care. Further study is planned in order to develop a more effective training program regarding terminal care at home.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	600,000	0	600,000
２０１０年度	500,000	0	500,000
２０１１年度	500,000	150,000	650,000
総　計	1,600,000	150,000	1,750,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学
キーワード：在宅看護

１．研究開始当初の背景
(1)2020 年ごろの我が国の年間死亡者数は、現在の 2 倍となり「多死」の時代へ突入すると予測されている。医療制度の改定や診療報酬の改定に伴い、入院期間の短縮化が図られる一方で、地域でのケア体制がまだ整っていない。本県の訪問看護ステーションは、慢性的な人材不足、設置数の減少が続いている現状にある。さらに全国でも有数の離島県であり、多くの斜面地のある本県においては、人口の過疎化高齢化（23.6%斜面地 35%以上）(17 年国勢調査)が進行しており、在宅看取りに対するケアの体制作りが急がれる。

(2)末期の患者に対する看護師の関わり方には、看護師自身の死生観や看護観が影響して

いると考えられる。在宅ターミナル医療に関わる看護師の看護観育成や意欲を高めるための教育、人材の定着化に向けた取り組みが重要である。米国では、終末期看護教育コンソーシアム(ELNEC:End-of-Life Nursing Education Consortium)という終末期医療に携わる看護師に必要とされる知識を提供する教育プログラムが開発され、効果的に教育できるツールとして欧米諸国で昨今注目を集めている。

２．研究の目的
(1)在宅看取りケアに関わる看護に必要な能力についてのニーズを明らかにする。

(2)学習教育目標を設定し、効果的・効率的な看護師教育研修プログラムを開発する。(長崎版)

３．研究の方法
(1)在宅看取りを担当している医師、訪問看護師・病院看護師、地域住民、遺族を対象として在宅看取りに必要な能力についてのニーズを明らかにすることを目的として、以下の方法で調査を実施した。
①地域在住高齢者 238 名を対象に、「希望する最期の場所」に影響する要因について、個人属性、健康状態、主観的健康観、SC 指標の観点から検討した。
②日本語版ターミナルケア態度 FATCOD-B-J を用いて、訪問看護ステーションに勤務する看護師 354 名を対象に、個人背景の違いによるターミナルケア態度に影響する要因を一般病院(がん診療連携拠点病院)に勤務する看護師 368 名のターミナルケア態度に影響する要因と比較検討した。
③がん診療拠点病院から退院する、高齢がん患者 (A 病院地域医療連携センターへ 2009 年 1 月～12 月の 1 年間に退院支援依頼があった 65 歳以上のがん患者 187 事例を対象とした) の自宅療養移行に関連する要因について検討した。
④A 県内訪問看護ステーションに勤務する医療スタッフ 85 名を対象として、必要とする、がん患者の在宅移行期における必要な連携情報について検討した。
⑤在宅での看取り経験のある遺族 6 名を対象として、家族が求める看護支援についてインタビュー内容をもとに検討した。
⑥在宅での看取りを担当している医師、訪問看護師、末期がん患者の在宅移行に携わっている病院看護師計 12 名を対象として、がん患者の在宅看取りで訪問看護師に必要な実践能力について質的帰納的に分析を行った。

(2)学習教育目標を設定し、看護師を対象とし研修会、事例検討会を開催し、評価した。
①「がん患者への緩和ケア」地域で看取るための協働とは　事例検討会　講演会
②「在宅での家族ケアを考える」事例検討会、グループワーク

４．研究成果
(1) 在宅看取りケアに関わる看護に必要な能力について、地域在住高齢者、在宅看取り経験のある遺族、在宅看取りを担当している医師、訪問看護ステーション勤務の看護師、病院勤務看護師の多方面から検討を行い以下の点が明らかとなった。

① 地域在住高齢者を対象に希望する最期の場所に影響する要因を検討した。男女ともに「自宅」を希望する割合が高く、女性に比べ、男性の方が自宅を希望する割合が高かった。男性では、「希望の介護者は配偶者」、「最期まで自宅で過ごすことが可能」と認識している人が、女性では、「ボランティア・市民活動に参加」している人が、「希望する最期の場所が自宅」に有意に影響していた。地域在住高齢者の「希望する最期の場所が自宅」に影響する要因は性別により異なった。これは地域在住高齢者を対象に「希望する最期の場所」とそれに関連する要因を検討したわが国最初の研究である。希望する場所での看取りが可能となるように、高齢者の性別による意向の違いを考慮することが必要であることを示唆した。

②日本語版ターミナル態度尺度 (FATCOD-B-J)を用いて、A 県内訪問看護ステーションに勤務する看護師、A 県内の一般病院に勤務する看護師を対象に自記式質問紙調査を実施し以下が明らかになった。
訪問看護師のターミナルケア態度の積極性には、年齢、性別、臨床経験年数、身近な人との死別体験には関連がなかった。看護師自身の「看取りの満足感」がターミナルケア態度の積極性に最も関連していた。在宅では、患者、家族に関心を寄せ、本人および家族が残された最期を大切に過ごすことができるように関わることができる看護師であれば、ターミナル期の患者へのケアに積極的に介入できることが示唆した。

③がん診療拠点病院から退院する、高齢がん患者の自宅療養移行に関連する要因を多重ロジスティック回帰分析で検討した結果、「家族の希望する退院先：自宅」(OR:10.8)「医療処置なし：注射」(OR:5.4)「ADL自立：入浴」(OR:4.7)「服薬管理」(OR:3.0)の順で、自宅療養移行に有意に関連していた。家族の受け入れ態勢と、医療管理、一部のADL自立は、高齢がん患者の自宅療養に対する重要な因子と考えられた。

④訪問看護ステーションに勤務する医療スタッフが必要とする、がん患者の在宅移行期における必要な連携情報は、家族(介護者)に関する情報が早期にされることであった。
また、すべてのIC項目において患者よりも家族についての情報を必要としていた。

⑤家族が求める在宅看取り時の看護支援は、*「察する」「患者と同じ目線」「明るい対応」「親切」「工夫」「熱意」「毎日来てくれる」「相談しやすい関係」「優しい言葉かけ」「迅速な対応」「連携」「知識の提供」「看取りへの準備を支援する」*ことが看護師に必要な能力として示唆された。

⑥医療スタッフが考える在宅看取り時においての看護師に必要な能力は、*「家族ケアの力」「療養者の苦痛を緩和する力」「療養者・家族の希望を支える力」「療養者・家族・医師の意向を調整する力」「医師や、多職種と連携する力」「看護師としての態度・姿勢」*がよい看取りの実現に関係していることを示唆した。

(2)緩和ケア、在宅看取りにおける家族支援に対する実践能力向上を目的として、離島を含め合計３回の看護師を対象とした、研修会、事例検討会を実施した。研修会参加者は、109名であり、参加後の満足度は高く、研修会内容は、有用であったと考えられたが、引き続き、実施、評価を継続し、より有用な教育プログラムの開発(長崎版)に向けた検討が必要である。

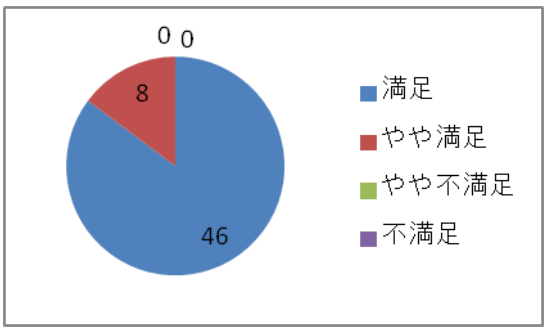

図１．研修会受講後の満足度

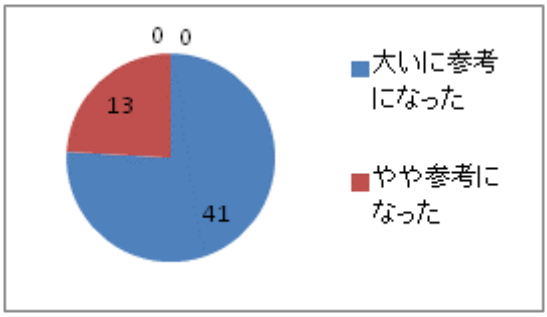

図２．研修課愛受講による知識

このプログラムは、多職種での在宅看取りケア実践での研修の中に組み入れることによって、さらに効果的な時代要請に応えるケアの提供体制を作ることに貢献できるものと考える。今後も、在宅看取りに関するより有用な研修プログラム開発のための研究を継続する。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計８件）
①大町いづみ、本田純久、安部恵代、叶兆嘉、横尾誠一、青柳潔、地域在住高齢者の希望する最期の場所に影響する要因、九州農村医学会雑誌、査読有、21(3)、2012、p19
②横尾誠一、大町いづみ、訪問看護師の死生観－一般病院看護師との比較－、第 16 回日本在宅ケア学会学術集会抄録集、査読有、16、2012、p72
③野副晃、田村瞳、松藤由布子、森園加奈、横尾誠一、川崎浩二、大町いづみ、がん患者の一般病院から自宅療養移行に関連する要因、第 16 回日本緩和医療学会学術大会抄録集、査読有、2011、p369
④横尾誠一、吉原麻由美、松島由美、大町いづみ(代表)、訪問看護師の死生観に関する要因の分析、第 15 回日本在宅ケア学会学術集会抄録集、査読有、15、2011、p94
⑤大町いづみ、楠葉洋子、浦田秀子、訪問看護師の背景とターミナルケア態度との関連要因、日本がん看護学会学術集会誌、査読有、25、2011、p294
⑥大町いづみ、楠葉洋子、一般病院看護師の背景とターミナルケア態度との関連要因、日本がん看護学会学術集会誌、査読有、24、2010、p155
⑦横尾誠一、大町いづみ、吉原麻由美、松島由美、訪問看護師の看取りへの態度に関連する要因、第 14 回日本在宅ケア学会学術集会抄録集、査読有、14、2010、p117
⑧横尾誠一、吉原麻由美、松島由美、大町いづみ、訪問看護師のターミナルケア態度に関連する要因の分析－一般病院看護師との比較－、保健学研究、査読有、22(2)、2010、pp84-93
長崎大学学術研究成果リポジトリ
http;//naosite.lb.nagasaki-u.ac.jp

〔学会発表〕（計９件）
①佐藤加奈子、内村智恵、北村周子、山中遼、横尾誠一、大町いづみ(代表)、がん患者の在宅移行期における必要な連携情報、日本家族看護学会第 19 回学術集会、2012 年 9 月 8 日、東京都千代田区
②大町いづみ(代表)、横尾誠一、田村瞳、野

副晃、松藤由布子、森園加奈、安部恵代、水上諭、後藤尚、青柳潔、高齢がん患者の病院から自宅療養移行に関連する要因、第22回九州農村医学会、2012年6月9日、宮崎市

③横尾誠一(代表)、大町いづみ、訪問看護師の死生観－一般病院看護師との比較－、第16回日本在宅ケア学会学術集会、2012年3月18日、東京都千代田区

④野副晃、田村瞳、松藤由布子、森園加奈、横尾誠一、川崎浩二、大町いづみ(代表)、がん患者の一般病院から自宅療養移行に関連する要因、第16回日本緩和医療学会学術大会、2011年7月29日、札幌市

⑤大町いづみ(代表)、本田純久、安部恵代、叶兆嘉、横尾誠一、青柳潔、地域在住高齢者の希望する最期の場所に影響する要因、第21回九州農村医学会、2011年6月4日、鹿児島市

⑥横尾誠一、吉原麻由美、松島由美、大町いづみ(代表)、訪問看護師の死生観に関する要因の分析、第15回日本在宅ケア学会学術集会、2011年3月20日、三原市

⑦大町いづみ(代表)、楠葉洋子、浦田秀子、訪問看護師の背景とターミナルケア態度との関連要因、第25回日本がん看護学会学術集会、2011年2月12日、神戸市

⑧大町いづみ(代表)、楠葉洋子、一般病院看護師の背景とターミナルケア態度との関連要因、第24回日本がん看護学会学術集会、2010年2月13日、静岡市

⑨横尾誠一(代表)、大町いづみ、吉原麻由美、松島由美、訪問看護師の看取りへの態度に関連する要因、第14回日本在宅ケア学会学術集会、2010年1月23日、東京都中央区

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕
○出願状況（計0　件）

○取得状況（計0件）

〔その他〕
ホームページ等
公開研修会用DVD作成

６．研究組織
(1)研究代表者
大町　いづみ（OHMCHI　IZUMI）
長崎大学・大学院医歯薬学総合研究科・講師
研究者番号：40342406

(2)研究分担者
楠葉　洋子　（KUSUBA　YOUKO）
長崎大学・大学院医歯薬学総合研究科・准教授
研究者番号：90315193

横尾　誠一（YOKOTA　SEIICHI）
長崎大学・大学院医歯薬学総合研究科・助教
研究者番号：90508318

(3)連携研究者
青柳　潔　（AOYAGI　KIYOSHI）
長崎大学・大学院医歯薬学総合研究科・教授
研究者番号：80295071

安部　恵代　（ABE　YASUYO）
長崎大学・大学院医歯薬学総合研究科・講師
研究者番号：90372771

本田　純久　（HONDA　SUMIHISA）
長崎大学・大学院医歯薬学総合研究科・教授
研究者番号：90244053